

教員は語る

芸大への期待・抱負・提言

二人の教員を招いて、東京芸大における教育のあり方、学校・学生に対して思うこと、将来への展望などを忌憚なく語っていただく新コーナー。

新任の抱負、芸大への期待

関根 能にかぎらず、芸術というものは、何しろ習得するのに時間がかかるものです。しかも一八歳から二二歳くらいの時期には学ぶべきことがたくさんあります。謡、舞をどんどん覚えていかなければとスタートが切れないこともありますので、古典を学ぶという点で、四年間は吸収するべきとても大切な時期なんです。

芸大に入るか、内弟子に入るかという選択肢のなかで芸大を選んだ人に、後悔しない四年間を送

藪内佐斗司

教授 文化財保存学専攻 保存修復・彫刻研究室

関根知孝

助教授 邦楽科 能楽講座

×

らせることがわれわれの務めである。芸大では、一般教養なども含めて幅広い面で学生生活を送ってもらわなければならない。

四年間にどこまで残る方向づけができるか、教員としての責任とともに、一生の原点になるような何かを感じてもらいたいです。

藪内 今年から、国立大学が法人化されたということで、今までとは違った経営センスで芸大が動いていくのではないかと大変大きな期待を持っております。

美術学校と音楽学校という本学の成り立ちのせいかもかもしれませんけれども、美術と音楽を分けて

しまっていると思います。しかし、洋の東西を問わず、両者は総合芸術のそれぞれのパーツにすぎなかったと思うんです。

能楽も、能面や楽器、装束をつくる方がいなければ成り立ちませんし、舞台は素晴らしい建築物です。本学には歌舞伎はないようですけれども、能や歌舞伎といった日本が誇る舞台芸術は、美術と音楽が融合したものだったと思います。

関根 おっしゃるとおりだと思います。私にはそれを結びつけることは今すぐはできませんけれども、学校に馴染れてきましたら、そういうことにとどんでん取り組んでいきたいと思っています。これは、





篠内佐斗司「水神童子」

言うのは簡単ですけども、実現するのは大変なことですね。

篠内 私自身は、彫刻制作とともに仏像の研究を一生懸命やっておりますが、仏像というのは純粹芸術で、いうところの「彫刻」である前に、仏教という大きな世界のひとつの要素なわけです。私が担当しております文化財保存学も、仏像彫刻の物理的な保存と修理だけというふうになんか小さくまとまってしまうと、本当につまらないセクションになります。保存修復を超えて、仏像とのかかわりのなかから、それらが生まれてきた世界観や日本人のこころの世界まで興味の対象を拡げてほしい、と私は学生たちにいつも言っています。そうでなければ、東京芸大の大学院にふさわしい研究にはならないと思います。

関根 素晴らしいお考えですね。

篠内 あまり枝葉にこだわらないで、自分が研究対象に選んだ仏像の奥には広大な世界観があるんだということを、若い研究者は忘れないでほしいと思います。

関根 修復に携わりながら、ご自身の作品の創作の活動もされていて、素晴らしいことだなと思いました。本当にわかっていなければこういう作品は生まれてこない。それを修復の中から本質をつ

かまれたんだということがよくわかりました。

日本の伝統文化のアカデミズム

篠内 国民の税金で運営されている本学にもかかわらず、わが国を代表する芸術表現として、本来あつてしかるべき研究領域が抜けているような気がしてなりません。

たとえば茶道とか、さきほど申し上げた歌舞伎などです。また華道、香道や、書道ありませんね。このことについては、外国の友人たちも一緒に首をかしげています。もちろん、いままでなかったことについてはそれなりの理由があるのでしようが、これから先もないままでいいのか、大いに疑問です。

とくに法人化して、ほかの芸術系大学との差別化を図り、わが国らしい芸術表現の分野で指導的立場を保ち続けるためには、いろいろ考えていくことがあると思います。たとえば教育課程の講座として新設しなくても、そういう分野を集中的に研究したり、対外的な発信に寄与できるような柔軟な研究機関が必要ではないでしょうか。

関根 邦楽、美術の二つだけにとられないものというのには必要だと私も思いますけれども、既存



篠内佐斗司「直樹」(やぶうち・さとし/なつき)

一九五三年大阪市生まれ。一九七八年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。

一九八〇年同学大学院美術研究科保存修復技術研究室非常勤講師(一九八七年)。

一九八七年台東区稲荷町に仕事場を構え、彫刻家として活動を開始して現在に至る。

二〇〇四年現職に就任。



関根知孝（せきね・ともたか）
一九五一年埼玉県生まれ。一九七一年東京芸術大学邦楽科卒業。
一九七二年観世流二五世宗家観世左近（元正）に内弟子入門。一九八一年能楽観世流シテ方として独立。
一九八四年より東京芸術大学非常勤講師を七度にわたり務める。
一九九八年重要無形文化財総合指定を受ける。
二〇〇四年より現職。

の組織のなかでそれを思い描くならば、どうやっていいのかがいつのいつの出てきますね。

鮫内 そうですね。まあそれは、私の夢というかわごともしれませんが、大学がそういう意志を持てば、必ずできると思います。新参者の言うことではないかもしれませんが（笑）。

関根 でも、そういう思いがあるということとは、私もとてもうれしいです。

鮫内 本学は、わが国の伝統的な芸術表現の分野で、主体的にアカデミズムを構築しなければならぬ大学だと思っています。この点が、ほかの芸術大学といちばん違う点だと思えますし、だからこそ芸大のアカデミズムに対抗するアンチテーゼを私学が創り出す意味もあると思うのです。卒業制作展を見ても、ほかの美術大学との違いがあまり明瞭でないのは、ずっと気になっていることです。

独創性信仰を超えて

関根 日本の文化といえば、邦楽や能というのをいちばん強く標榜しなければいけないわけですよ。

ね。
以前に新聞のコラムを読んでいたしたら、グラフィックデザインの大家の方が、自分たちの仕事

は独創性が非常に重んじられて、完成度は二の次だというような意味のことを書いておられました。若いころ私はこれを読んで非常にショックを受けました。

私たちの能の仕事は、独創性というのは最初に求めるものではなくて、習ったことの完成度を高めていって、そこから独創性なるものが自然ににじみ出てくるものだというような方向だったわけですね。鮫内先生のおっしゃったこと言えば、仏像の修復に携わりながら仏教を学ぶのと同じように、能のほうは、古典を学びながら、ただその形だけを追い求めているのでは話にならない。どうやって能のなかにある精神的なものをつかむかということが大事で、それをつかまなければ独創性は出てこないし、つかみさえすればいくらでも出てくるわけなんですけれども。

鮫内 ある意味では、一個人の独創性に対する信仰の時代というのはもう終わったと思うんです。世界的に、スーパースターと呼べるアーティストが生まれていないことからそれはいえるのではないのでしょうか。

また私たちが芸大の学生だったころに比べて、日本文化に対する関心がとても高くなっているようにも感じます。たくさん若い女性が仏像を訪

ねて歩き、「和」を看板にしたり日本を特集した雑誌がたくさん売れている。現実の暮らしたら、日本が消え去る寸前だからこそ、無意識に自分自身を探しているんじゃないかな。

いま和楽器をつくるひとたちの現状は大変厳しいようですね。芸大に和楽器をつくる科を設けるとは言いますが、さまざまな分野でわが国の芸術表現を支えている人たちがより安心して素晴らしい仕事を残せるような環境を、政策的に提言していく義務が芸大にはあるんじゃないでしょうか。

関根 美術の先生からそういう言葉をおっしゃっていたら、こちらで努力、働きかけをしなければならぬと感じています。たしかに「困った、困った」と言いながら手をこまねいているような状態でもあるわけなんです。

美術・音楽・思想を統合する

関根 芸大の音楽学部は、九割がクラシック音楽の先生方です。宝生流の助教授の先生がいらつしやいますけれども、私が教授会に出てみてもひとりだけ投げ入れられたような感じがいたします。三味線系統は交流もありますけれども、能のほうはどことも一緒にやることはないものですから、邦楽科の



学生を指導する関根知孝助教授

なかで意見をまとめるにしても、まず理解を得るというのが大変なのです。能のことで言えば、美術のほうともいろいろなかかわりを持たないとならないですけど、芸大にはそういう場がありません。

演奏芸術センターと音楽字部の共催で五月に行われた 邦楽アンサンブル は、今年で三回目ですが、ふだんは別々に舞台に立っている邦楽科の先生方がそろってひとつの作品をつくるという企画です。一年目が「熊野の物語」、去年は「竹取物語」、今年は「宮沢賢治の宇宙曼荼羅」でした。これは美術との協力ということで舞台をつくってありますが、協力を得られたから盛り上がったのではないかと思います。今後さらにどういう形で進めていくことができるか。邦楽アンサンブルという形で行われたわけですけども、「芸大アンサンブル」という形で音楽と美術の調和、協調に育っていくならば、たいへんな仕事ですけども有意義かなと思います。

藪内 音楽と美術、そしてそれらを統合する宗教や思想というトライアングルでひとつの世界を再び創りあげていくことを志向しなければ、わが国本来の日本の芸術表現は滅びていくと思います。

関根 思想というとかたく固まるような感じがあるかもしれないですけども、つくった人の思いが音楽家のほうに伝わって、それと調和するような表現が何か生まれればおもしろいと思います。

藪内 そういうふうに、美術と音楽が総合芸術となるためには、それを包み込む思想文化がなければならぬと思います。私の専門領域の仏像も、

仏教文化を理解しなければ成り立たない。お能の場合も、まず中世人の幽玄の世界を理解できなくては、意味をなさないでしょうね。

関根 能もいろいろな側面がありますが、神道も重要な要素です。また能の幽霊というのは仏教によつて救われるものが多いわけですけども、救われた状態を表現するのではなくて、救われるまでの悩みとか、そこに至る過程がおもしろいのです。

私もでも、ゆくゆくは、藪内先生がおっしゃったみたいな大きな思想というものに没頭したいのですが、能のほうは、そこまで持っていくのは大変なことだなと思います。先生のほうは、仏像の修復ということで、いやが応でも仏教に真正面から向き合っていかなければいけないわけですね。

藪内 そうなんです。ですから、芸大にも、先端的な表現を追求したり、グローバルゼーションを標榜したりする方々もたくさんいらして、もちろんその分野も大変重要なことですが、本学では、それと同じくらい日本のここを探る分野を大切にしなければいけないと思います。今日の対談はたまたま能楽と文化財保存という取り合わせでしたので、そこらあたりが結論になりそうですね（笑）。

岡倉天心の建学の精神に、創作と古典研究という二本柱があつたと思いますが、これを縁にぜひ関根先生とは、古典の分野での太い柱を芸大のなかに一緒につくっていければと願っています。

関根 まず藪内先生と同じ気持ちでありますのでどこまでできるのかということはあると思いますが、自分の力を注ぎがばってやってみたいと思います。